

第三百七十二回 青葉会

平成二十九年三月二十三日(木)

午後五時半〜八時半 文京区民センター

〈顧問〉

☆ 川合万里子 先生

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 豊田ゆたか  
中野一灯 山崎亜也 山内天牛 山本三恵(後半、選句のみ)  
伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 古田昇 宮内規雄 山田けいこ  
渡邊盛雄

〈紙上選句〉

赤田堅 安部眞希子 楠田彦十 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章  
福島正明 星田啓子 MH氏 村田くに子

《互選句》

七点

☆ 花かんざし華ぐ楽屋の初日(しよにち)かな 紀久男(堅・万・千・ゆ・敏・正・啓)

(☆…「花簪」は季語にならない)(祇園の舞妓らが楽屋見舞い)

☆◎ 牧駆くる駒啓蟄の土飛ばす 一灯(猛・万・孤・弘・ゆ・く・天)

(☆↓「啓蟄の土飛ばし駆くる牧の駒」)

☆ 河東節三百年の春歌舞伎 天牛(堅・眞・万・弘・千・敏・正)

☆ 野遊びや手の平に乗る嬰(やぎ)の靴 孤舟(眞・万・彦・灯・允・く)

(☆…「手の平」↓「掌」)

☆ 釣釜の微かに揺れて外は雨(茶室) 五郎太(万・灯・啓・M・天・三)

☆ 幹裂けし老木今年も花の咲き ゆたか(堅・猛・万・千・龍・敏)

(☆…中七↓「老木(おいき)に今年も」)

☆◎ 堰越ゆる水きらめけり初ひばり 一灯(紀・万・孤・允・啓・M)

(☆↓「堰越ゆる水の煌めき初雲雀」)

◎ 日輪の使者かも知れず初蝶来(く) 昇(孤・弘・龍・ゆ・く・三)

☆◎ 独り身となりし友訪ふ春夕べ 天牛(忠・万・孤・弘・敏)

五点

☆ 春の野辺逆立ち競ふ父子(おやこ)かな そらお(眞・猛・忠・万)

(☆…語順を変えて俳句のリズムを強調したい。↓「父と子の逆立ち競ふ春の野辺」)

☆ 眩(まば)ゆくも舞台の廓(くるむ)春不夜城 紀久男(万・彦・敏・天)

(☆↓「春廓舞台の不夜城眩しかり」)

☆ 浪花の春釘煮贈られ家苞(いえづと)に 全(堅・万・彦・ゆ)

(☆…語順を変えてリズムカルに「家苞に釘煮贈られ浪花春」)

☆ 春間近道行く人の顔と声 猛(万・彦・正・三)

(☆↓「道を行く人の顔や声春近し」)

☆ 春満月權(かじ)のしづくの瑠璃となり 孤舟(万・龍・灯・三)

(☆…下五をしつかり締める↓「瑠璃光り」)

十寸見(ますみ)会三百年を寿ぎて

☆ うららかや継ぎて守りし江戸の節 恵洲(万・紀・千・啓)

☆ 棧俵(さんだわり)肩寄せ合ひて難流る 堂哉(万・五・弘・三)

(☆↓「棧俵に肩を寄せ合ひ流し難」)

☆ 芽起しの雨お昼寝の保育園 一灯(眞・万・弘・啓)

◎ 落ちてなほ天守を守る赤椿 けいこ(堅・孤・龍・正)

恍惚の人となりゆく春の闇 盛雄(紀・猛・忠・三)

☆ 陽炎や縄文佳人の吾を招く 孤舟(千・正・亜)

(☆↓「吾を招く縄文の佳人陽炎へり」)

☆ 見納めて踵を返す老桜 弘子(紀・万・M)

(☆…「て」↓「の」)

☆ 春光の三陸の浜怒涛寄せ ゆたか(万・五・灯)

(☆↓「春光や三陸の浜へ怒涛寄せ」)

三点

☆◎子とペダル漕ぐや囀高き野を

一灯 (万・孤・允)

◎残雪や和毛(こげ)吹かるるけもの徑  
◎ほろ酔ひて飛んで行きたや春の月  
☆春宵や胸に翡翠の支那佳人

全 (真・猛・啓)  
けいこ (聖・孤・龍)  
亜也 (万・彦・く)

(☆↓「華の佳人翡翠を胸に春の宵」)  
☆雛守りいつしか迎ふ米寿かな

全 (万・忠・天)

再診の葉書連れ来し春霞  
☆暖気(おくび)にも先ほど食べし露の臺(先生の(特))

盛雄 (真・啓・く)  
天牛 (万・龍・三)

二人乗るボートを押すや春の風  
☆標本木靖国桜綻びぬ

そらお (允・M)  
猛 (万・亜)

(☆：三段切れにならないように↓「靖国の標本木桜綻びぬ」)  
☆◎春の宵祝ぐ河東節三百年

忠彦 (万・孤)

☆さくら咲くメーメル自然と七五調(先生の(特))  
(☆↓「さくら咲きメーメルは自然に七五調」)

全 (万・亜)

☆夫婦して助六歌舞伎の花に酔ふ  
病室を終のすみかに花の雨

全 (紀・万)

☆風船の転がつてゐる汀かな  
春の昼金平糖を転がして

孤舟 (万・亜)

◎翻る翅に力の春の蝶  
☆花魁道中とふ絢爛や江戸の春

五郎太 (千・天)  
弘子 (孤・敏)

☆春めくや日毎浮き立つ旅心  
☆咲き満ちし一(ひと)むら杯に鳥雲に

堂哉 (万・千)  
ゆたか (紀・万)

◎囀りや己が青春高らかに  
京づとの口にやさしき鱈かな

全 (忠・五)  
規雄 (猛・孤)

☆春泥も遊び場となり子等の声  
☆ホワイトデー花よりだんご熨斗袋

亜也 (紀・五)  
けいこ (允・く)

(☆：三段切れを避ける為に助詞の「の」を一つ足す↓中七「花より団子の」)  
☆そこはかと無き初蝶の一日かな

天牛 (万・正)

一点

☆初音聴く初日(しよにち)の舞台気合込め  
☆友気負ふダンス習ひに喜寿の春

盛雄 (五・允)  
紀久男 (万)

☆草餅の滴(したた)るいろに胃が応答  
☆ウオーキング春を探しに多摩川へ

全 (万)

☆雛ケーキ親が食べたく買ひにけり  
翻訳にまたも手を入れ鳥雲に

忠彦 (万)

☆切腹の浪士偲ぶ日木の芽雨  
石小さく立てし盛り土薄堇

五郎太 (紀)

☆風光る朝の緑茶は我がビタミン  
☆春光の溢れブランコ宙に舞ひ

全 (灯)

☆祇王寺に密やかに咲く梅真白  
手作りの衣にあばた桜餅

弘子 (亜)

☆咲き初めし木蓮の幹ふと節を撫づ  
しづかなり無人の駅に春の道

ゆたか (万)  
昇 (彦)

☆五家宝(ごほう)が遠出の土産春スキー

亜也 (天)  
全 (M)  
けいこ (M)  
天牛 (万)

●次回青葉会

四月二十七日(木) 午後五時半〜八時半

文京区民センター

△当季雑詠各自五句、投句二句

●今年度会費集めます

五月二十五日(木) 井の頭公園吟行

平成二十九年三月句会報

一 今回は名古屋転勤から戻られた三恵さん（後半から、選句のみ）含め11名出席。投句8名。孤舟さんからの「俳句界」「俳句四季」「丘の風」と小生持参の「萬緑」終刊号（806号）を回覧し乍ら開始。弘子さん寄贈のカツサンド（まい泉）、三恵さんからの純吟「雪椿」（新潟・加茂）、亜也さんの大吟醸「大信州・別園い」、忠彦さんの純吟「酔心」（広島）、一灯さんの桜葉入り短冊最中（多摩・紀の国屋）、小生の海老と烏賊の煎餅（伊勢のカドヤ）と缶ビールなど甘辛の名品を堪能しつつ、猛さんの進行役で順調に推移。御覧のように一灯さん、天牛さんが好成績でした。二次会は富坂下の「居酒屋」で皆様御満足のようでした。

二 関係者近詠

折鶴を春一番へ飛ばしけり	万里子	平和とは火と水ゆたかに年用意	眞希子
雨上り花菜明りの椀の央	全	目貼りして家の行く末悩むまじ	全
吟行の朝朗朗と鳥の恋	全	家族葬の讚美歌歌ひに冬の星	全
満開の老桜仰ぎ同窓会	全	冬晴れて花料辞退白寿の葬	全
子と読みし絵本を孫と見る日永	全	子世代は娶らず嫁がず流行風邪	全
花の日の花を児らから交番へ	全	落葉搔く柄長き熊手空を搔く	弘子
脱稿や梅雨明け朝の日本晴	全	校正の目を引く向ひの聖夜の灯	全
転んでも泣かぬ末子と新緑裡	全	癒えませと紅い実ひとつ藪柑子	全
牡丹まだ蒼抱きしめ山の寺	全	「萬緑」への最後の投句年逝かず	全
殖えつづく鈴蘭を分け友近きぬ	全	枯菊の黄を雑念しと言ふべしや	青史
芝刈りやマイナンバーを詣じつ	全	常ならぬ吐息の白さ妻転倒	全
子供たちどくだみどつさり抜き競べ	全	幽へ這ひ明へ這ふかも冬の蜂	全
猛禽の卵の孵る極暑かな	全	父と子に共通語なし開戦日	全
身じろがぬ落蝶へ入む蟬時雨	全	年詰る導きの日は誰にぞ来る	全
三月月と明星の間（あり）遠花火	全	初雪や句会へ急ぐ老朋友	紀久男
風立つ夜実梅落ち次ぐ夢うつつ	全	華語英語盛んに紅葉の高尾山	全
師の墓へ句碑へと巡る林檎の季	全	――「萬緑」3月号（終刊号）	
長生きのお手本はな子亡き秋に	全	たんぼばや目利き寡（すく）なきこの世界	正明
塀の蔦引くや隣家の雀騒	全	白足袋のきつき鞋（こはぎ）や梅香る	全
花畑の縁取り確（し）わり秋海棠	全	春の夜や助六支える河東節	全
芋の露三つを一つに寄せる風	全	諸鳥の声にぎやかに春障子	允章
奔湍の波頭を掠め鬼やんま	全	足裏に大地の弾み青き踏む	全
朝まだき野兎跳ぶ徑を母郷行	全	下萌やささやくやうに水の音	全
乙子（おとこ）らが妹と呼ぶ飼兎	全	春めくや助六下駄の高鳴りて	千恵
句会へと颯風裡から身を躲し	全	○通行人Aの大きなマスクかな	丹野敦雄
耳にまで草の実詰まり隠れん坊	全	――「俳句」3月号 嶋田麻紀選	
同郷の走者応援秋日和	全	「萬緑」後継誌として「森の座」を興さんとす	
谷越しに日がな一日蟬時雨	全	○草田男を呼ぶや応々春松籟	横澤放川
詩筵なほ別れ難なの白露かな	全	――「萬緑」森の座 選者	
萬緑を抱き森の座へ詩途さやか	全	――「俳句」4月号 16句より	
――「萬緑」3月号『詩途』30句（川合万里子）			

平成二十九年四月十日

紀久男記